

かわさき文学散歩

～明治から昭和初期の川崎風景～

古くから盛んだった「川崎大師」への参詣、田園風景を求めて移り住んだ作家たちの見聞など、明治から大正期の川崎の情景を描いた作品をご紹介します。

江戸東京《奇想》徘徊記 【種村季弘】 朝日新聞社 2003年刊 P40

《内容》

博覧強記で知られる著者が30の街を紹介。江戸や明治を偲ばせる、街の姿を案内。そのうちのひとつを「川崎・大師河原の水鳥すいちょうの祭り」と題して、その魅力について語っている。

《川崎に関する記述》

大師河原の水鳥の祭りには、有名な別名（「酒合戦」）がある。巻末には奈良茶飯の浮世絵や水鳥の祭りの写真も掲載、その様子がうかがえる。

ちいさい隅すみ 【大仏次郎】 六興出版 1985年刊 P7～、P182～

《川崎に関する記述》

著者の祖母の家が堀之内にあった。当時の川崎は宿場町としての用がなくなり、寂れていたようである。また、東海道から横路地に入るとすぐに畑があり、農家が散在していたという。

《内容》

新聞に掲載されていた連載随筆をまとめた本。川崎には母の実家があり、夏休みになると小学生の大仏は、姉と一緒に祖母の家に泊まりに行っていた。収録の「つきかげ」「夏休み」は当時の思い出と、川崎の様子が綴られた一遍。

種村季弘（たねむら すえひろ）

1933～2004年。東京都生まれ。アカデミズムの枠を大きく超える特異な評論・エッセイを発表。漫遊記、旅行記、温泉記なども手がけ、『種村季弘のネオ・ラビリントス』では泉鏡花文学賞受賞。

大仏次郎（おさらぎ じろう）

1897～1973年。横浜市生まれ。大学卒業後、翻訳の仕事をはじめ。著書に『鞍馬天狗』シリーズのほか、『赤穂浪士』等の歴史小説、『ドレフス事件』『バリ燃ゆ』など。

修学旅行の記

【芥川龍之介】 岩波書店 1997年刊 P25～

《内容》

龍之介が東京府立第三中学校1学年のとき、大森・川崎方面に修学旅行をした時の作品である。(芥川龍之介全集21)

《川崎に関する記述》

川崎大師に参詣し、「参詣人引きもきらず」とその賑わいの様子を記述している。参詣後川崎停車場から帰宅した。

だんちょうていにちじょう

断腸亭日乗

(大正13年12月29日)

【永井荷風】

岩波書店 1993年刊 P301

《川崎に関する記述》

大正十三年十二月春のように暖かい日の午後、荷風がふらりと川崎大師に参詣した時の日記である。川崎大師参詣後、塩浜の海辺まで歩いた時の様子が記述されている。

《内容》

荷風の大正6年から昭和34年の死の前日までの日記である。激動期の日本の世相とそれに対する批判を、詩人の季節感とともに綴っている。(荷風全集21)

めし

(新潮文庫)

【林芙美子】

新潮社

1954年刊

P194、P204～

《内容》

親を捨てたような形で結婚したにもかかわらず、初之輔との夫婦生活に倦怠を感じている三千代。奔放に生きる姪の里子の来訪によって、夫との関係はよそよそしさを深めていく。

《川崎に関する記述》

著者が横浜市鶴見区矢向に住んでいたことがあり、川崎の駅前大通の描写や、職安の前を歩いたなどの記載がある。

芥川龍之介

(あくたがわ りゅうのすけ)

1892～1927年。東京都生まれ。1916年『鼻』を発表し作家となる。評論や箴言集を除けばすべて短編小説。作品に『羅生門』『地獄変』『河童』『或る阿呆の一生』など。

永井荷風 (ながい かふう)

1879～1959年。東京都生まれ。20歳頃から作家を志す。著作に『あめりか日記』『溼東綺譚』ほか。大正6年から死の直前までの42年間の日記を『断腸亭日乗』として残した。1952年文化勲章受章。

林芙美子 (はやし ふみこ)

1903～1951年。山口県生まれ。様々な職につきながら、詩や童話を書いた。自身の人生を日記調に書いた『放浪記』がベストセラーとなる。著書に『晚菊』『浮雲』『めし』など。

忘れえぬ人々 (明治の文学22) 【国木田独歩】 筑摩書房 2001年刊 P52

《川崎に関する記述》

溝口付近、現在は失われた亀屋が舞台。島崎藤村の揮毫による石碑が、旧亀屋前にあったが、現在は高津図書館前に移設されている。

《内容》

“忘れえぬ人”とはどのような人物だろうか。多摩川に近い宿屋亀屋において、偶然となり合わせた若い文学者と無名の画家が話をする。文学者にとって“忘れえぬ人々”が語られていく。

武蔵野 (明治の文学22) 【国木田独歩】 筑摩書房 2001年刊 P47~

《内容》

武蔵野の趣き、季節によって姿を変える落葉樹林の風景の美しさを、自身の日記、友人からの手紙、ツルゲーネフが樺の林を描写した文章などを引用しながら、当時の話し言葉で表現している。

《川崎に関する記述》

友人からの手紙の中に武蔵野の範囲についての考えを述べている一節があり、丸子、登戸、二子などの地名が挙げられている。

田園の憂鬱 (岩波文庫) 【佐藤春夫】 岩波書店 1951年刊 P110~

《内容》

著者の居住した、柿生に近い農村を舞台とする。都会の息苦しさを逃れて寒村に移り住んだ青年の心象を描いた散文作品。風物の牧歌的な美しさが青年の鋭敏すぎる感受性を通して描かれる。

《川崎に関する記述》

王禅寺近辺で見かけた糸とり娘の姿、王禅寺で飼われていた犬のエピソードなども。

国木田独歩 (くにきだ どっぼ)

1871~1908年。千葉県生まれ。明治期の詩人・小説家。教師・新聞記者などを経て詩人・作家として独立、自然主義文学の先駆をなす作品を発表。作品に『武蔵野』『忘れえぬ人々』など。

佐藤春夫 (さとう はるお)

1892~1964年。和歌山県生まれ。詩人、小説家。与謝野鉄幹に師事し、短歌や詩を発表。そのの小説『田園の憂鬱』『都会の憂鬱』によって人気作家となる。著書に『晶子曼荼羅』『小説千恵子抄』など。

都筑ヶ丘の風物 (ふるさと文学館17) 【河上徹太郎】

ぎょうせい 1993年刊 P583

《川崎に関する記述》

王禅寺に由来する「禅寺丸」など川崎の産物にも触れる。

《内容》

著者の居住した柿生、片平の風物を主題とする随筆。舞台を同じくする佐藤春夫の『田園の憂鬱』を引用・紹介しつつ、都筑ヶ岡と呼ばれた丘陵の魅力を、二匹の猟犬を伴う狩猟の様子を中心に生き生きと描く。

エピキュールの丘 【河上徹太郎】 講談社 1956年刊 P225ほか

《内容》

柿生に在住していた著者による随想集。親交のあった小林秀雄、井伏鱒二、吉田健一などのエピソードを紹介し、文壇の交友録としてもおもしろい。

《川崎に関する記述》

柿生の鳥猟や風物の項もあり当時の地域の様子がうかがえる。

水曜手帳 (昭和15年11月) 【柳田國男】 筑摩書房 2003年刊 P343~

《内容》

國男が時間の取れた水曜日に、近郊を巡った時の思索をまとめた随筆。神奈川新聞に掲載されていた連載随筆をまとめた本。(柳田國男全集30)

《川崎に関する記述》

麻生区王禅寺の昭和15年当時の農家や寺の記載がある。また、柿の「禅寺丸」の名の源についてふれた記事もある。

河上徹太郎 (かわかみ てつたろう)

1902~1980年。長崎県生まれ。文芸評論家。音楽評論から文筆活動をスタートし、フランス象徴詩の研究からその批評原理を確立した。著書に『自然と純粹』『日本のアウトサイダー』など。

柳田國男 (やなぎた くにお)

1875~1962年。兵庫県生まれ。日本の民俗学の創始者として名高い。岩手県遠野地方に伝わる民話を集めた『遠野物語』など民衆の生活に伝わる文化を研究し、体系化した。著書に『海上の道』など。